

経済学を学ぶ人のために

1

現代は経済時代といわれるように、新聞やテレビで経済問題がとりあげられない日はない。物価問題、公害問題、円の切り上げ問題など、応接にいとまのない程である。けれども、経済学に対する国民一般のイメージは必ずしも良くない。経済学はむずかしいという救いようのない先入感を一般の人々がもっているからだ。しかも国民的常識となっている経済的思考の中には社会主義体制になりさえすれば万事うまくいく、といった体制還元型の公式論や、政府を批判しながらも何でも政府にやってもらおうとする無責任論、あるいは素朴な善玉悪玉論が意外に多く、「あちらを立てればこちらが立たず」といった、システムの思考になれていない。「経済には経済の論理がある」ということを、まず理解することが必要である。経済の論理を無視して国際社会に通用しない考え方で押しまくろうとしても、いつかはつじつまが合わなくなることは、このたびの円切上げ問題をみても明らかである。

同じことは国内問題についてもいえる。たとえば、公共料金据え置き 명령にしても、一時的には問題を回避したかに見えても、それは問題の真の解決とはならず、矛盾が累積するだけである。物価の美濃部さんでも、東京都の水道料金を値上げしなければならないのである。シュムペーターがいみじくも指摘するように、「われわれは真剣に各々の理論を理解することは努めなければならない。克服をではなく理論を、批判をではなく習得を、単なる肯定あるいは否定をではなく分析と各命題における正しきものの抽出とをわれわれは欲する」のである。

とくに経済学のように学派の対立があって、初学者を悩ましているわが国の現状では、文献から学ぶだけでなく、事実そのものから謙虚に学ぶという

姿勢が望まれる。実際、経済学の歴史の中で、古典的名著となっているものに共通する特性は、事実の動きから多くの発見を行っているということである。経験科学としての経済学は、その成立の当初から、科学的観察を不可欠の条件としてきた。観察とは、観るだけでなく深く考察することを意味する。いかなる学説といえども、仮説の検定において不適切にあれば、修正を余儀なくされるのである。学ぶことと信ずることは、別問題である。どんな理論でも、それを盲目的に信奉するならば、もはや科学ではない。

2

はじめに経済体制論に関する入門書から解説することにしよう。

(1) 山田雄三著『流動する経済体制』（日本放送協会、昭和45年）

(2) 加藤寛『経済体制論』（東洋経済新報社、昭和46年）

かつてイギリスの経済学者ピグーは、資本主義と社会主義の比較を、傷だらけの女性とヴェールをまとった女性との比較にたとえたことがある。未来をバラ色に描けば、社会主義は無限の可能性にみちた恋人ということになるからだ。けれども、社会主義国家が誕生してから半世紀以上もたったし、資本主義国家も、失業や独占問題から多くの教訓を学び、かつてのそれと同じものではなくなった。しかも両体制に共通にみられることは、所有と支配（経営）の分化傾向であり、所有がどうなっているかというよりも、機能のあり方いかんが両体制の差異をきめる重要な要素となっている。

資本主義対社会主義、近経対マル経という陳腐な論争を、ジャーナリズムは面白がってとりあげ、現在でもイデオロギー論争が続いている。しかしこれほど不毛な論争はなかった。現実存在するものは、資本主義国家群と社会主義国家群であり、しかも同じ体制下にあるといっても、各国はその歴史的・社会的・政治的事情によって、発展段階や類型にかなりのちがいがあ
る。また両体制の間には、共通問題があつて、ものによっては程度の差といえるものもある。同じ人間である以上、経済生活には共通の面が多いのである。

山田教授は、現在横行している直観的体制論を批判し、経験的・開放的な考え方を通じて、対立の奥に対立を越えたものがあるとなす。すなわち、いずれの経済体制も、個人の自由と国家の計画とをどのように組み合わせるかという点で、むしろ共通の組織化の問題にとり組んでいるというのである。経済体制はある理念に閉じこもるべきものではなく、経験を積み、工夫を重ねて、絶えず改善を求める開放的なものでなければならない。教授は、「民主主義は知識の尊重を離れては成り立たない」ことを強調し、民主主義や自由主義が、現在の日本においてかなり変態的な形で現われ、独善や圧力や暴力さえしきりに行なわれていることを批判する。本書はNHK市民大学講座の放送講義をまとめたものだが、経済体制論のすぐれた入門書として推薦したい。

加藤教授は本学の講師をかねておられるが、しばしば海外を旅行し、その鋭い目と人間に対する暖い心で、各国の経済システムの特質を、事実にもとづいて吟味され、これまで多くの著作を公けにされてきた。本書の特色は、何よりも事実そのものから学ぶという謙虚な態度で、両体制の比較を理論的・実証的に行なったところに求められる。それは両体制についての固定観念との幼想上の対立といった、戦後日本のジャーナリズムが好んでとり上げた「果たし合い」方式とは基本的に袂を分かったものである。

教授によれば、「できるだけ客観的な経済体制の選択を可能にするような議論を提供することが比較体制論の課題」であり、現実の経済体制の優劣比較よりも、それを通じてひきだされる教訓が有益なのである。本書においては、経済成長、経済的平等、経済的安定の三面から、両体制を比較し、プロパガンダと実感との間のギャップを、データそのものとして語らしめている。さらに教授は、両体制が次第に収斂傾向にあり、最適体制をつくることが現代の課題であり、とくに未来社会は、ますます流動化社会へと向うであろうから、とくに情報への参加システムをつくることが大切だと強調している。

経済学の入門書は汗牛充棟もただならぬ現状である。しかしながら、沢山の入門書の中には、本当の初心者にとっては難かしすぎたり、あるいは不必要、不適切——したがって贅沢知識ないし有害知識——と思われるような内容のものが意外に多い。とくに共同執筆のものには、その傾向が強いようである。したがって、本当にスタンダードになりうるテキストを熟読することが望まれる。難かしい経済理論をやさしく説くということは、一見した以上に難かしいものである。この点、大家の筆になるものは、簡にして要を得ており、まさに「賢者は一言にして足りる」といった印象を受ける。標準的なテキストとして、次の四点を推薦したい。

- (4) 中山伊知郎『初等経済学講義』（勁草書房，昭和30年）
- (5) サムエルソン（都留重人訳）『経済学』上下二巻，原書第八版（岩波書店，昭和46年）
- (6) ヒックス（酒井正三郎訳）『経済の社会的構造』（同文館，昭和29年）
- (7) ピグー（塩野谷九十九訳）『所得—経済学入門』（東洋経済新報社，昭和27年，増補版，昭和34年）

これらの著作はいずれも洛陽の紙価を高めたものだが、いずれもユニークな特色をもっている。まず中山教授の著作は、NHKの教養大学講座で放送されたものをまとめたもので、経済法則の真髓をわかりやすく説いている。経済学のエッセンスを短いスペースの中に手ぎわよくまとめた入門書として、これの右にいずれのものはまだ出ていない。

サムエルソンの著作は七たび改訂が加えられ、内容も豊富で説明も懇切丁寧である。マクロとミクロ，新古典派とケインズ派経済学の統合がなされているが，とくに現代の経済問題を論理的に料理した手法はみごとである。しかし，分量が多く説明がくどすぎるといふ難点がある。

ヒックスの著作はソーシャル・アカウンティング（社会会計）の理論をふまえて，経済循環のシステムを平易に解説したもので，ピグーの著作とともに

に、国民所得論の入門書として適切である。しかし、両著は、この副題が示しているように、経済学入門として標準的な内容をもっている。とくにピグーの著作は例示が適切であって説得的である。なお、サムエルソンとピグーの理論モデルを日本経済に応用してまとめたものとして、次がある。

(8) 市村真一『経済循環の構造』（創文社、昭和29年）

ところで、経済学を勉強する場合には、経済学の歴史について、一定の知識をもっていることが必要である。文学作品であれば、すでに中学生や高校生時代に、主な作者や作品に接している。ところが、経済学については、代表的な学者の名前は知っていても、その著作を読んだ人はむしろ珍しいのである。シニヤーの学生をもふくめて、経済学の歴史の流れについての知識は、昔の学生よりも乏しく、これは本学の学生に限ったことではない。古典的名著に接するためにも、次を推薦しておきたい。

(9) ハイマン（喜多村浩訳）『経済学説史』（中央公論社、昭和25年）

なお近代経済学や計量経済学を学ぶためには、経済数学や統計学の基礎をマスターしておくことが必要である。この点、次にかかげる安川教授の著作は、内容も文章もわかりやすく、統計的分析方法がつかわれるときのすじ道を理解するのに最も適切な入門書といえる。安川教授は本学の講師をかねておられるが、本書の内容はその講義と同じく、事例やたとえ話がツボを得て感心させられる。

(10) 安川正彬『統計学の手ほどき』（日本経済新聞社、昭和40年）

4

かつてJ・S・ミルは、「経済学しか知らないものは、実は経済学そのものを本当に知ってはいないのだ」ということを指摘した。たしかに、経済学は社会諸科学の一つであり、社会現象のうち、経済的側面はスポット・ライトをかけてでき上がったものである以上、社会現象そのものを広い視野からとらえ、それによって経済学そのものの座標を理解すべきである。しかしながら、問題意識をもたないで、いたずらに領域を拡大すると、分裂症におち

いる危険がある。学問というものは穴掘りと同じく、深く掘ろうとすればどうしても幅を広げざるを得ないのである。必要はに応じて拡大した方がよい。私自身、学生時代のころ、読むべき本があまりにも多く、しかも読むための時間が限られているために、そのジレンマに悩んだことがある。だが同時に、経済学の周辺を散策したために、この迂回作戦によって経済学に対する理解が深まったという経験をもっている。その意味で、小著ながら、わさびのきいた名著を次にかかげておくことにしよう。

- (11) ボールディング（清水幾太郎訳）『二〇世紀の意味』（岩波書店、昭和42年）
- (12) ティンベルヘン（清水幾太郎訳）『新しい経済』（岩波書店、昭和39年）
- (13) 伊東光晴『現代の資本主義』（筑摩書房、昭和46年）
- (14) 坂本二郎『知識産業革命』（ダイヤモンド社、昭和43年）
- (15) 中山伊知郎『産業と人生——私はこう考える』（日刊労働通信社、昭和45年）

以上にかかげた著作は、たとえていえば、生まれてはじめて山に登って下界を眺めた時の感銘に通ずる何ものかを与えるものである。ボールディングが過去からの教訓に多くを学びながら未来への展望を試み、ティンベルヘンが東西問題や南北問題への展望を広げてくれるというふうに、国際化時代における日本のあり方を考えさせずにはおかない。伊東氏の著作は「週刊朝日」に連載されたものだが、「研究者として苦闘している問題を専門外の人に知ってもらえるように書いた」腕前はさすがであり、日本経済が直面しているいろいろの問題点に鋭いメスを入れている。また坂本氏の著作は、日本経済の動きを未来の眼でとらえたユニークなものであり、世界の先頭を切って解決すべき問題をかかえた日本そのものを知るための適切な入門書である。

中山教授の近著は、対話形式でまとめられたもので、本書を読んだとき、私はかつて先生のゼミナールで、きびしく、しかもあたたかい指導を受けた

学生時代を思いだした。本書は伝統的な経済学の領域をこえた、すぐれた文明批評論ないし日本文化論ともなっている。きき手のひきだし方もたくみであるが、まさにゼミナール方式の真髓に接した感がある。とくに興味深いのは、経済至上主義に対する批判、および、マルクス、シュムペーター、ケインズ、ガルブレイス、サムエルソンなどの学説を、先生特有の手法で吟味し、適切な評価を与えたところである。日本経済新聞に連載されている「私の履歴書」を読んで、「苦境にあってその苦境をどうして脱却したか」ということを知るのが一番おもしろいと述懐されているが、この辺に先生が、トインビーの「挑戦と応戦」の思想に共鳴されている一つの理由があると思う。

しばしばいわれるように、「名著は読者ととともに成長する」のであって、現在のように出版物が多い時代には、賢明なる選択が必要である。古池だけを読む必要はないが、少なくとも「古典的名著」として、風雪に耐えうる本だけは読んで欲しいと思う。学生時代は二度と来ないのである。学生時代でなければ読み得ないような、そしてこの一冊だけは本当に読んだといえるような、相手にとって不足のない第一級の著作に挑戦して欲しい。原書であるならばさらに望ましい。そのために払った苦心が多ければ多いほど、喜びや収穫もまた大きいのである。以上にかかげた15冊の本から、経済学の古典的名著への途を発見していただけたならば、幸いである。（伊藤 善市）